

# 【資料紹介】下村観山画房日記『やまの上』

柏木 智雄

## 解題

横浜美術館は、平成二五年度に「生誕一四〇年記念 下村観山展」(会期：平成二五年一月七日～同二六年二月二日)を開催し、同展を機に、下村観山のご遺族より、次の資料をご寄贈いただいた。

①『やまの上』(大正八年一月一日～大正九年六月三〇日)、和綴、

二四・七×一六・二cm

記録者：入江多平

②『日記帳』(大正九年七月一日～大正一〇年一月二〇日)、和綴、

二四・五×一六・五cm

記録者：入江多平・下村英時 他

③無題(大正一五年三月二九日～昭和二年三月二九日)、和綴、二四・五×

一六・七cm

記録者：中庭寂明(煖華)

④無題(昭和二年三月三〇日～一〇月五日)、和綴、二四・七×一六・八cm

記録者：中庭寂明(煖華)・下村英時または章

⑤『山の松葉 下村家』(昭和二年一〇月六日～昭和三年四月三〇日)、

並製本、二三・三×一六・〇cm

記録者：下村英時、下村章、柳下善三郎(晴屋)

⑥無題(昭和三年五月一日～昭和四年八月一七日)、並製本、二三・三×

一六・〇cm

記録者：下村英時・柳下善三郎(晴屋)、他

これらの文書は、観山の弟子の入江多平・中庭寂明(煖華)・柳下善三郎(晴屋)、あるいは英時を中心とする観山の子息が筆記した画房の日記で、書翰の受発・通信、来客、観山の活動(制作、外出)、金銭の出納など、画房の動向の詳細が記録される。日々、もたらされる膨大な制作依頼と作品納品の催促、箱書、鑑定(古画から春草や紫紅、孤月、栖鳳らの作品)の依頼などの備忘が、日記の最も大きな役割であったと思しく、応需制作の諾否、画料受領に関わるトラブルを回避するのにも役立てていたと思われる。

この日記群については、すでに、原三溪との関わりから紹介・分析がなされている(清水緑「下村観山と原三溪にみる作家と支援者の関係」『鹿島美術研究』「年報第二十四号別冊」、財団法人鹿島美術財団、平成一九年一月、二八六～二九七頁)が、日記自体は翻刻されていない。大正一〇年末から同一五年当初の記事を欠くものの、画房の日記は、観山晩年の日常や作画の様

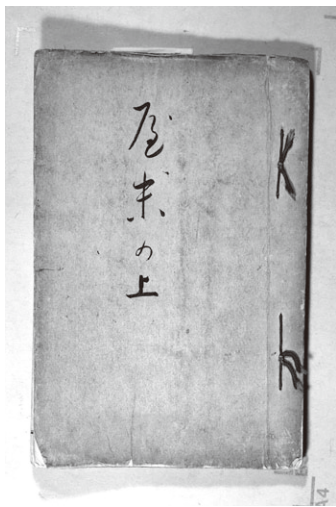
子を伝えてくれる貴重な資料であると考え、本研究紀要において、右記の日記六冊（挿図1）を順次、翻刻・紹介し、今後の観山研究に資することを目論むものである。

紀要本号において紹介する『やまの上』（①、挿図2、3）には、大正八年（一九一九）一〇月一日から同九年（一九二〇）六月三〇日までの家内の出来事が、途切れることなく墨書されている。ノドに「①中村屋製」の印刷文字が認められる市販の袋綴じ冊子（丁数一八九）を使用し、一・二丁の表側に大正九年六月三〇日の出来事が記され、六丁をはさんで、巻末に家蔵する装束の目録が記される。これは、大正九年三月二七日に江戸協会宛に発送・出品された装束二八点の備忘である。

ここでは前半部分である大正八年一〇月一日から翌年二月二九日までの記事を翻刻・紹介する。

### 観山の動向、制作

『やまの上』の頃の観山を巡る動向のうち注目すべき事柄としては、帝国美術院の創設を挙げることができる。大正八年九月六日、勅命により帝国美術院規定が發布され、同月八日、院長以下会員が任命された。原敬内閣の文部大臣・中橋徳五郎は、これを機に、在野の美術団体の統合をはかるべく、日本美術院から横山大観と下村観山を帝国美術院会員に招こうとしたが、大観、観山そろってこれを固辞した。『やまの上』の一〇月四日の記事に「大観氏より電話。先生、電話口にて九日出席の由回答す」とあり、同月九日に「先生上京。京橋□□「（香当カ）コウセツ」軒にて中橋文相等と会見との事」とある。こ



挿図2



挿図1



挿図3

これは、帝国美術院創設からひと月経過したこの時点で、会見の主旨は不明ながら、大観、観山が、文部大臣と直接、面談している事実を伝えている。

観山の子息の下村英時が著した『下村観山伝』（後藤茂樹編『下村観山 観山画集』大日本絵画、昭和五六年、分冊）には、大正八年の部分に「十一月十六日、観山会会員一行と京都に遊ぶ」と記されているが、『やまの上』の記録によれば、観山が夫人を同伴して、観山会会員と親睦を深めるために上洛したのは、一〇月一六日であり、奈良を巡って、同月三〇日に帰宅している。京都の宿所であった柵屋から柿や鮎すしなどを横浜の留守宅に送り（一〇月二五日記事）、家人を気遣う観山夫妻の心根を垣間見ることが出来る。一方で、旅行から戻ると、にわかに、箱書や鑑定依頼に來客がひきも切らない様子が読み取れる。

文中に「○」の印影の朱文印が捺されている箇所には、観山の制作に関する記述が認められる。おそらく下村英時が『下村観山伝』を執筆するに当たり、制作の記録を日記で検索する目的で、印を付したものと推測される。その中でも、大正元年に前田侯爵家から依頼された明治天皇行幸記念絵巻は、制作に難渋し途絶していたが、東洋美術史家で帝室博物館の学芸委員であった中川忠順の督励を受けて、制作に再度着手している。大正九年一月二十九日の事に、「前田侯爵の例の絵巻第□を先頃から初められて居るが、健築が面□倒なので、なかなかはかどらぬ様子。階段には、平困だと云っておられる」とあり、建築物とくに階段の描写に苦心していたことが分かる。五日後の二月三日に「中川忠順氏宛『○』絵巻一部分送る」とあり、制作に一定の進捗があったことをうかがわせる。

この間の日記を通読すると、帝国美術院創設にともなう画壇再編への対応、

観山会会員をはじめとする後援者や関係者との交際、そして、累積する制作依頼の処理などで多忙を極める観山の日常が見て取れる。そうした状況下、大正八年一〇月五日には「大胡医院より堀医師を招き先生診察。大分胃が爛れて居る由。電話にて黒須氏へ十二日の観山会延期を申込む」という記述が認められ、また翌年二月二十七日の記事には「先生、具合悪し。例の病、眠むられぬ由」とあり、慢性的な疾病を抱えていたことが分かる。

### 記録者について

『日記帳』②の表紙裏に、「自 大正九年七月一日 至 大正九年十月廿五日 多平記」「自 大正九年十月廿六日 至 大正十年十月廿日 英時記」の補記がある。『日記帳』の当該期の筆跡に鑑み、『やまの上』の記録者も多平、すなわち入江多平で間違いない。当時、入江多平は、本牧和田山の観山邸で書生をしていたと推測される。『日記帳』②の大正九年十一月一〇日の記事に、「本日、入江多平氏、下村晴時氏二階へ移転す」と子息の英時が記している。記事にある下村晴時は観山の本名であり子息が敬称を付して父親のことをこのように記すのは不自然であるので、「下村清時氏」すなわち観山の長兄（英時の伯父）の誤記であろう<sup>脚</sup>。多平は観山のもとを離れ、『やまの上』において、「下の下村」と通称される清時（号・豊山）邸に移っている。清時は、この年の九月、日本美術院彫塑部の同人に推挙されている。また別の日記③の大正一五年六月二二日の記事に「入江多平氏死去の通報が豊年氏から来た。二十一日午前九時なりしと。逝年卅歳？」とあり、多平は観山のもとを離れておよそ六年足らずで死去している。記事にある「豊

## 凡例

年」は「豊山」の誤記かと思われる。多平の兄の入江美法は、日本美術院院友の能面作家であり、著書『能面検討』（昭和一八年、春秋社松柏館）の奥書にある「著者略歴」には「故下村清時・下村観山両先生に師事し、面打ちを業とす」とある。ちなみに奥書の著者名には「みのり」と名の訓みが付されている。美法は、師匠清時の息女・幹、すなわち観山の姪を嫁に迎えており、下村家と親戚関係にあった。

なお、平成二三年度に当館の所蔵となった「下村観山関連作品資料 画稿計二九七点」は、入江美法・多平兄弟の縁者から寄贈されたものであり、下村観山、入江多平（あるいは美法）、前所蔵者（多平・美法の縁者、在宇都宮）の来歴をたどったと推定される。

注 『日本美術院百年史 四巻』（日本美術院百年史編纂室編集、財団法人日本美術院発行、平成六年、九四七頁）所収の下村清時の閨歴に次のような記述がある。「尚、再興美術院展覧会の第一回から第六回展の出品者名が下村晴時と記載されているが、同時に発行された（絵かき）には下村清時と記載されている。」

一、本稿は、下村観山が横浜の本牧和田山に構えた居宅兼画房の、大正八年（一九一九）十月一日から同九年（一九二〇）十月三十日までの家内の出来事を記した日録『やまの上』を翻刻したものである。

一、翻刻にあたっては、下村家から寄贈の申し出を受けた原本にあたり、読解の便を考慮して、原本の体裁を尊重しつつ以下のよう改めた。

- ① 本書の形状による改行等については原則として追込みとした。
- ② 固有名詞や明らかでない意図をもって使用されている旧字体以外は、原則として新字体に改めた。算用数字は「拾」「廿」「卅」を除き、「壹」を「一」、「弍」を「二」として新字体とした。また、異体字をそのまま用いた場合がある。
- ③ 変体仮名は平仮名に改めた。
- ④ 原本の抹消部分は、該当箇所左側に「〜」で示し、抹消箇所に訂正がある場合は、左側に「〜」で示すとともに、右側に訂正の字句を記した。
- ⑤ 加筆・挿入文字は、その文言を「」で括った。
- ⑥ 再読文字は漢字を「々」、片仮名を「ヽ・ヾ」、平仮名を「ゝ・ゞ」、二重字は「〜」とした。
- ⑦ 本文中に誤字、脱字、意味不明な文字がある場合、「ママ」「カ」など行間へ注釈を付記した。
- ⑧ 汚損等で判読できない箇所、罫字となっている箇所は、字数が判明する場合は□□□で示し、字数が判明しない場合は□□□□などをもって示した。
- ⑨ 編者が加えた注は「」で示した。
- ⑩ 適宜、読点や句点、並列点を付した。

【表紙】

やまの上

【表紙裏】

自 大正八年十月一日

至 々 九年六月卅日

第一号

大正八年十月

【十月<sup>(欄外)</sup>】

一日 曇天 大掃除

手伝土方男二人、女二人、魚きた。掃除済みし頃より雨降る。来客なし。

二日 概ね晴

石川安助使、箱書渡す。(一) 引船 (二) 月光 (舟ニ腰掛け足ヲ水面ニ垂ルテキル図、孤月(三) 山水。高築誠之助、画室へ通す。若松某、三ノ谷、川田氏、照介<sup>マ</sup>持参。春草筆「夏草」三男治時代の作、少しく不審故、大観氏へ持参の旨話す。午前、奥様、前田青邨氏宅を訪ふ。絵巻の下図の件。兎玉天来、船橋警察署長、同伴来訪。原田金蔵使。発信、柘屋 松茸の礼状。

三日 曇り

大塚源太郎、箱書(半切一休)、本日青森へ立つ由。

四日 曇り

今日も曇り。長谷栄吉、箱書に来る(尺八巾蓬萊)。預る。原田金蔵代人。大観氏より電話。先生、電話口にて九日出席の由回答す。

発信、長井利右衛門方川村、関西協賛会。

五日 曇後雨

三越美術部より屏風二双着。安川大成堂、此の廿四が展観故、写真の都合もあり、何卒御問合せを願ひ度しとの事。一週間後、出来いたせば通知する旨を約す。

電話、本局七八番 安川大成堂。

太田吉松、武山氏照介<sup>マ</sup>持参。以前の五拾円に、後金一百五拾円にて半切四枚と解決。斎藤元四郎、着色山水人物入を希望の由。

来信、横山大観。

大胡医院より堀医師を招き<sup>(急)</sup>先生診察。大分胃が爛れて居る由。電話にて黒須氏へ十二日の観山会延期を申込む。羽織を着る程のさむさ。夜に入れば雨さへ加はる。

六日 風雨強し

かなりの風雨に戸も開け得られず。新聞は台風と出る。午後、雨止む。乾南陽、火事の際に火災をまぬかれたらしい一幅、小督局(明治卅年頃ノ作)、鑑定に持参。電話にて大観氏へ明日の伊予<sup>(料亭)</sup>紋行きを断る。

来信、井口庄蔵、村上(旧菅沼廉)、電報にて明七日面会を求む。

発信、返電 村上(断り)。



七日 雨後晴

午前中ほとんど雨。夜になると忘れたかの様に星が出る。

八日 晴

秋晴れ心地よし。大阪堀氏より松茸着。早速晚餐に上す。白井新助、芝区佐久間町書画屋。

孤月、波に日出、箱書、観山記としてあり、図も共ニ偽筆。

先生、撫子と瓦、今迄度々鑑定ニ来りシモノ。

是真、影法師、二三日前持参セシモノ。偽筆。

福沢某（元博文館員）、夜に入つて来訪。電話、蛸殻町長井氏、大観。今宵が十五夜の由、月出づる。

九日 快晴

京橋区中橋小路角 越條福太郎

々々 灵岸島町三 坪井義意知

両氏より薦被り着。田町渡辺の奥様御出。夕刻御帰り。午後三時半頃、先生

上京。京橋□□「（香当カ）コウセツ」軒にて中橋文相等と会見との事。南次五郎、箱

書持参。春草筆「落葉」。不在に付預る。柿沼氏外二名（越條氏と坪井氏）。

伊東、藤原某、鉄砲と箱書持参。先生が近頃紀州地方へ旅行なさるから、就

いては鉄砲が必用だと申されたとか。小柳町大久保の伝次様よりの手紙故、

今日持参いたせしと云ふ。何にかの間違ひだと云つて、箱書だけ預つて鉄砲

と弾七十発は返す。佐青木宣一、南画ニ観山ト落款ノアルモノ四幅持参。長

谷栄吉の使、箱書。

山笑ふ、山に雉の飛べる図、六月頃の景色。

出山釈迦、尺五巾。関谷小次郎が寺の分として描かせしものなれど、二幅とも長谷の手から箱書に来る。先日の蓬萊の箱書も渡す。東京会田中良助、夜に入りて来り、此の廿日頃までにとの事。呼出電話、番町二、九四一、小寫大成堂より電話にて催促（ツツ）、十一時頃先生帰宅。

十日 晴 後雷雨あり

朝、電話を黒須様へつなぐ。来客、島田友春、岡野抵策、原田使、（尺五、一枚位にて解決）。黒須廣吉、松寫勝之助（南ノ箱書渡。春草落葉）。黒須様来ての話。観山会、来る十六日と決定。

十一日 土曜日 晴

夕、先生と下の下村を訪ふ。渡辺実、郡山の菊地某、鑑定「引舟」。此の引舟の図は先日京橋石川安助より参りしものと同一の図、唯、彩色のや、淡きもの五百円と、其他、荒木十畝等の幅二、三と東京の書画屋と交換せし由。

十二日 晴

村松雨石、半切依頼の件、謝絶。沢津松溪、展観ノ件。保田龍門、栗山清太郎同伴。十一月白木屋ニ於ケル南紀展覽会出品画ノ件。寺内の使、北方堀口橋（カ）氏の表装持参。岩崎（歯医）友人一名、夫人同伴ニテ邸内拝見トノこと。光用穆、川上邦世氏紹介。夜、堀口氏宅へ表装出来の幅持参。代、三十三円五十銭預る。「○」安川大成堂息へ二尺巾愛蓮ノ図渡す。

十三日 曇り時々雨降る

来信(書留)、黒須氏より鉄道切符来る。午前、乾南陽他一名同伴。奥村とか云ふ卒業生の由。夜、下の下村の御夫婦来たる。諸井婦人の帯二本へ日本三景を描く。

十四日 概ね曇り

真砂子町諸井氏宅へ電話を通ず。千葉島田友春氏より、卵子五拾余入箱着。夕刻、諸井四郎氏来訪。帯渡す。石川安助代人、依頼画の件にて来る。発信、島田友春(礼状)。

学校の裏から見える山(天徳寺山とか云ふ)を崩つしてゐた土方の一人が、大きな土塊の下になりて速死<sup>マツ</sup>とか云ふ。

電話、小石川二、二七九 本郷湯寫新花町九十四、諸井四郎。

十五日 水曜日 晴

沢津松溪、芝区築地清水禎治、箱書ニ来る。図、逝く春と題して箱書す。四十二、三年頃作。野辺に牧童二人、鳥をかこみたはむる図。下の吉田の婦人、箱書に来る。鍾鬼<sup>鐘</sup>。三越清水氏、屏風の件にて来る。彼の屏風は中村、朝吹両氏に寄贈の由。揮毫料は五千円にて、内金一千円持参。此度の観山会の下図「淀君」二尺巾と尺八の(中央に船があつて山があつて虹があつて雨が降つてゐる。蓑を着た二人は舟に居る)は柘屋へ贈るのだそいな。

十六日 快晴

午前の八時頃、京都観山会へ御立ち、十時頃自分も文展へ行く(午後十時半

帰宅)。不在中、水戸の渡辺氏と京都の放光堂より生鮭と松茸着。

水戸市上市裏信願寺町八、渡辺実

京都市烏丸通二條下ル、石田放光堂

下の吉田へ箱書届く。

十七日 概ね晴

午後、赤羽雪邦氏使、月琴と箱書持参。平塚、中根へ四百円計り支払ふ。林の奥様の移転、荷物夕刻荷造りなし出す。明朝十時頃迄には着く由。総数四十五個。

神田区猿樂町二丁目三番地

午前京都より電報にて無事着と知らせあり。原田金蔵使、何やら奥様にと小さき箱入りのもの持参。

新潟県中浦原郡金津村、渡辺喜四郎

と書いた札が付いて梨の荷一個着。送り状が来てないから、運賃は此次頂きに出ると云つて帰る。

十八日 土曜日 晴

神田へ移転に就き、午前、東京へ出掛けらる。珍らしく大人が留守。淋しそな顔もせず遊ぶ。□□らしきものなり。親をはなれた淋しさならん。午後、日下吉平氏代人、観山筆「雪景月夜」持参。手紙、菓子折共預る。

来信、赤羽雪邦。下谷区谷中坂町七九、赤羽知足。

林の奥様、午後十一時帰宅。

十九日 日曜日 晴

画室、小座敷をさがす。未だ見あたらず、不可思議な事なり。美濃安八郡の渡辺文三より柿(四十七個入)着。石岡町、太田吉松氏より栗着。京橋区柳町二、稲垣利恭より箱書願ひたしとの事。

来信、有朋堂、小菅一、渡辺文三。

廿日 雨

柘屋より松茸着。

廿一日 曇り

大塚源太郎、奈良漬樽呉れる。先頃の東坡先生の屏風の一件、佐々木氏は一万円位へにて手に入れ度き由。三の谷、門田氏より屏風(松)拝見に出いと、電話にて申越む。

発信、柘屋(松茸の礼)。太田吉松(栗の礼)。渡辺文三(柿の礼)。  
来信、長谷栄吉。

廿二日 晴

根岸鉄太郎、宮川大寿旧博文館員、明治四十三年十二月(五浦時代)、知人より依頼され、絹本にて、二尺巾、長サ四尺五寸を依頼した由、揮毫料として金三拾円を価額表記にて絹を書留にて着せし由。尤も奥様の手らしき受取のはかきと、其節、絵絹屋よりの受取を持参してゐる。追加金をするから何分御願ひ、たすと云ふ。麻布区笹筒町五番地。梨の箱を開ける。八十五個入り、梨の受取来る。山田様と相談の上、奈良ホテル宛、オホツカヒトツニ

テカウヘンマツと電報(至急ウナ)にてうつ。料金九拾銭也。林の奥様、絵巻下図の件にて横須賀へ行く。三崎にて何んでもよく当ると云ふ、鶴屋の番当来り、御預けいたせし太物頂戴したいと云つてゐるが、誰れも留守にてわからぬ。

廿三日 曇り

奈良ホテル宛、うった返電が来ぬ。奈良を御立ちになったかもしらぬ。英時君、修学旅行(那須塩原方面)の由にて、午後六時頃出掛ける(廿二日)。  
発信人、ヌマタ、として、アス、ゴック、オマチタノムへと返信付きにて電報来る。消印は芝浜松町局とのみ。多分、沼田一雅氏かも知れぬ。然し沼田氏の居所不明につきそのまゝになす。

廿四日 雨

山田様来り、本月末十五日位の予定にて、塩原へ御出掛けの由。  
来信、東横浜駅より荷物到着通知書来る。郡山よりリンゴの荷発送の由にて、午前(七時)にて帰る。そら豆蒔く。

来信、南葵育英会、安川大成堂、沼田一雅。

東京府下渋谷町一、七九六 沼田一雅。

封書にて電報の事申し、面会を求む。早速返電す。

アルヂ、ルス、ノチ、シラス。

廿五日 雨後曇り

午前、東横浜駅へ荷物の件にて行く。大坂堀喜二氏来訪。箱入呉服物呉れる。



北海道、太田鐵次郎氏より塩鮭着。

来信、内山種一（書留、為替券三円在中）。

広島県府中、浅野定二郎。

太田鐵次郎、町田清治。

発信、太田鐵次郎。佐野。

東京本所小泉町三五（墨竹）、土屋耕造より箱書の幅着。東京下谷区西黒門町三、内山種一より箱書の幅着。京都柘屋滞在の先生から柿一箱、香魚すし一箱来る。柿もスシも早速一同にて拝味。奥様よりの御手紙に、あちらにて二三枚御執筆の由、画印並びに裕、羽織等を送れとある。魚喜多の家内昨夜□□にて死去、弔みに行く。

廿六日 晴

高寫屋店員に栖鳳紙五枚渡す。トランク一個、柘屋宛桜木町駅より出す。一

円六十二錢也。小玉天来氏来訪。

発信、横浜新聞社（為替二円返送）。北海道三上運送店、長谷栄吉 散木画社、

伊東源四郎、内山種一、林萬芳。

廿七日 快晴

来信、東京大林区署、橋本関雪（仏像集）。

発信、橋本関雪（礼状）。

中根の話、これから芝が百坪位いる由。下水工事費、一百六拾七円八拾八錢

五厘の請求書受取る。

五浦七一八番 原野。

実測面積 一反三畝拾五歩。

々々 三畝拾八歩。

右を私受希望あらば、十月十日までに当署に出願せよと、云ふのである。

廿八日 雨

観艦式なれど相憎くの雨。水戸、渡辺氏、齋藤隆三氏同伴来訪。渡辺氏、箱書の板置いて行く。沼田一雅氏より電話。

愛知県碧海郡安城駅前、杉浦市治郎

書留にて百円の為替券在中の封書、絵絹の包着。明年の一月までに何でもよ  
いから御染筆願ひたいと云ふ。一先帰りまで預る旨返事出す。町田清治来訪。  
明治四十年、尺幅、金拾円持参の由。現今ではあまり不足ゆえ追加金百円い  
たしたい。凶は寿老で仕上、尺巾、丈四尺五寸位。

新潟県南蒲原郡中之嶋村字中之嶋、堀半次

封書書留にて箱書を依頼して来る。為替券六円在中。

廿九日 曇天

安城駅前、杉浦と云ふ者へ、昨日の百円券を断り状と共に返送す。

卅日 晴

午前八時頃、先生帰宅。日下氏使、手紙持参。安城駅前、杉浦氏宛、絵絹返  
送（普通便）。午後二時、桜木町東本願寺へ飯田氏の会葬に行く。本郷向ヶ

岡弥生町三番地はノ三号、電話、小石川三五八五 黒須廣吉

卅一日 天長節 曇天

岐阜、五藤竹重郎氏来り、来月中旬に入用なれば、是非願ひたしとて、菓子料五拾円を出す。これは留守とて返す。五藤竹重郎発信の松茸着。

十一月(欄外)

十一月一日 土曜日 曇天 旧九月九日

先生が御帰りになつて在宅だと、俄に箱書だの鑑定だのと人が来る。鎌倉の表具師だと云つて、孤月筆の幅を五、六幅持参して、何れも箱書をして貰ひ度いと云つてゐた。そのうち一幅大横物があつた。出陣の処か知らぬが、真中に大将分の鎧武者(び)が立つて、前方を悲な眼でみつめてゐる。左右や後の方に、家来らしきものが腰を落してゐる。中には女で鎧を付けてゐるのもある。孤月にしては珍らしい図だと思つたら、孤月ではないそうだ。孤月は人物は描けない人だそうな。だから偽筆だと云ふ。孤月が値がよいために、出品画にでも描いたものを落款をいれたのだらう。今一つ、半切で春草で柳に燕の図があつた。この図は、以前、信州の書画屋が鑑定に持つて来たのを、下谷の前八重が買ったのだつた。これも全く偽筆。午後になつて、京橋の古物商理事とか云ふ肩書の付いた名刺を持つて、氏家某と云ふ男が来た。春草の大幅、これには横山大観の五月雨の頃と云ふ箱書がしてある。鑑定して戴きたいと云つてゐた。先生ハ見て疑問だと云つた。山形巳之次郎氏来訪。茨城県に、花崗岩で一丈三尺の石燈籠があるから差上げ度いが如何ですと、写真を見せてゐる。白痴威の燈籠である。何処へすゑるつもりかしら、其他、支那官服二枚(夏物)を置いて行く。

二日 晴

高田の小菅氏来訪の由。

三日 曇天

千葉島田氏へ返電。小玉天来氏来る。

四日 雨

島田友春氏来訪。新潟の堀半次と云ふ人から来た箱書依頼の小包を開けてみると、北斎の描いた様な狐が描いてある。六円の為替券に手紙を添へて、箱の中に入れて返送する。本な所の土屋と云ふ男から来たのが墨竹で、下谷黒門町の内山からのが両国の煙火。これは両方ともに真筆である。尺八、六枚と尺五、三枚の絵絹を張る。島田氏と入り違ひに渡辺実氏来訪。夜、五藤竹重郎(東京)より電話。

五日 晴 旧曆 九月十三夜。

発信、紀淑雄、嶋盛図、土屋耕造、南紀美術会徳川家

内山種一箱書(川開き) 発送。長谷栄吉、箱書持参。半切「一休」、先日、大塚に渡せしもの。今一枚の半切「錦木」、南次五郎に渡せしもの。尺八を二枚新たに依頼したいと云ふ。一枚は帰去来(観山会のと同様なもの)。一枚は白菊、これも観山会に描きしものと云ふ。今は中村房次郎氏蔵と云ふ。多分老人が白菊の前に立つて居る図なのだと思う。

日下吉平氏、麴町三番町二。新橋二、二七一。

伊東源四郎来訪。夜、田中良助より電話。

六日 晴

三越清水氏来訪。越後より梨着。多分、井口様前の料理屋だらうと云ふ。

七日 快晴

京橋高島屋高橋初郎氏、秋の展にて、二尺巾、一、尺八、一、都合二枚の絵絹持参。廿一日頃開会。青森、宮越正治氏より林檎荷一個着。川島鉄之助来訪。画帖の催足。<sup>マツ</sup>

来信、松岡文橋。

八日 晴

原田金蔵来訪。大塚より電話にて、午後伺ひ度しと云ふ。

発信、宮越正治（林檎礼状）、島田友春、長岡常磐楼（梨子礼状）。

〔○〕二尺巾、唐美人、大阪三越沢津松溪氏宛、書留にて出す。夜、沢津氏より十二日に伺ふ旨、電報あり。

九日 曇天

赤羽氏、手紙持参。大野氏来。箱書と月琴の件。箱書は三平ノ図の由。日光、小村溪雲氏来。大塚源太郎来。鑑定もの持参。尺五巻り墨、風竹（偽筆）、遠山の春（真筆）。

十日 曇り 寒むし 火鉢を出す

加藤とか云ふ通信記者来。千登世女将来る。大阪三越沢津氏より電報にて無事受取ると来る好意を謝すと申し来る。五藤竹重郎、長谷栄吉来。高橋徳三来。

岐阜県武儀郡吉田村西町、林代蔵

小包にて毛皮、葉巻一箱着。長谷栄吉は、帰去来（二尺巾尺八巾）一枚と半切一枚だけ今年中に御願ひいたしたいと云ふ。

〔欄外〕拾日 <sup>以下欄外</sup> 安川大成堂より展観集一部来る。此の終りの方に、先頃鑑定に来た春草の横物 <sup>び</sup> が出てゐる。

十一日 雨

此頃の天気は毎日雨でヒヤ／＼とさむい。これがあたりまへなのだらう。三越美術部清水来。明日、午前中に出来の旨話す。夜、電話にて日本橋の古物商某であるが、一週間以前御願ひいたした箱書が出来てゐるかと思つてゐる。話しが馬鹿にせきこむのであるので聞きとり難いか、<sup>び</sup> こうである。春草の横物で船に三人の  が乗つてゐる図が、何日、箱書 <sup>び</sup> 出来るかと云ふ。箱書等に預つてない。何かの間違ひぢやないかと聞きたゞすと、間違ひでしたと云ふ。そして、持つて上つたら何日出来ますかと云ふ。あれは疑問の画であるから断つてしまったものだと電話を切つてしまった。これは、此月の初めに古物商理事何とか云ふ、やかましい肩書の名刺を出した男が持つて来たものだ。昨日夕方、京都柘屋から湯殿のスノコ <sup>び</sup> か三枚来た。珍らしいスノコである。

八八 <sup>欄外</sup>

十二日 曇天

岐阜の野村忠左衛門より糶糶漬 <sup>び</sup> 来る。昨夜電話で話のあった日本橋の竹内とか云ふ男の使が春草の「五月雨の頃」を箱書 <sup>び</sup> に来る。すでに大観の箱書 <sup>び</sup> か

してある。観山観と裏へ入れる。此の幅と雅邦先生の四幅対とで、一万五千円にて、此間安川から求めしと云ふ。〔○〕三越美術部清水氏代人へ尺八双幅「静清」渡す。午後八時頃兒玉天来氏来。漬物樽二個呉れる。

岐阜県羽島郡上中寫村字仲、野村忠左衛門

十三日 概晴

京ばし石川安助代人来。十二月十三日、展観に就き、写真等の都合あれば本月下旬に入用の由。夜、碗屋主人来。

十四日 雨

深川東元町二、安藤徳三郎より小包にて大きな菓子入の鐘着。此人より、先頃、安藤サク出として、菓子折小包にて来りしも、何う云ふ訳か知らず受取。今日も亦来る。不思議故、き、たゞす。杉山仙助へ振替にて拾八円七拾錢払ふ。為替五拾円くむ。伊豆の山田様へ送るもの。横電の従業員一同怠業のため、午後五時頃より運転休止。夜、東京会田中氏来訪。来月三日展観に付き、此の廿日頃までに願ひ度しと云ふ。承知の旨返答す。南紀美術会後藤氏より電話、十七日より白木屋にて開会の由。

下谷 甲 七七〇番 後藤

十五日 晴

精華社小林来。錦絵芝居集成一冊、精華帝展号一冊呉れる。大阪三越沢津氏来。二尺巾揮毫料、一千二百円持参。受取出す。先生と三溪園へ行く。美術協会のため蔵品珍列。小柳町大久保の夫人来。真島彦次郎氏へ日下氏預りの幅渡

す。岐阜の書画屋岡本喜三郎より送り来たる。雨中の船ノ図は偽筆、返送すべく荷作る。自分達等外出した留守に、石原氏が岩立義太郎、杉山環湖の二人を連れて来て、一百円と尺五の絹本を出して無理に依頼して帰った由。

十六日 快晴

赤羽氏代に大野と云ふ人来る。「三平」の箱書の蓋と月琴渡す。所得税と戦時利得税と合せて三百七拾五円納める。岐阜岡本の鑑定物返送。ホト、ギス社の山名氏来。十八日午前の約束。野毛の倉林氏、石原氏と来。水戸渡辺実氏より納豆着。渡辺氏自身も来る。

十七日 概ネ晴

島田友春氏来。大分県日出町井上勇五郎氏より、シヒタケ着。相沢某鑑定。南画に観山の印あるもの。巻り四枚。天谷某、風竹（尺五）鑑定に持参。先生と野村サムライ商会へ行く。野村氏の話。先日御依頼したのを、一枚で結構ですから何分御願ひすると。二千五百円で十枚描けと云ふ注文は取消になる。

十八日 雨後 晴

飛騨国吉城郡上宝村蔵柱、中畑米次郎  
日本アルプスの自然生山葬たと云って送って来る。此の男は小学校を建てるから寄附して貰ひ度いと云って来た事がある。ホト、ギス社から画をとりに来るかと思つたら、今日は来ない。夕方茅町の横山様へ電話を掛けたが、話の出来ぬうち時間で切れてしまった。

十九日 快晴

出雲崎、佐藤吉太郎来。画帖、及び寄附画（二尺横物切）渡す。兵役の件にて市役所へ行く。ホト、ギス社山名氏、小品、〔○〕紅葉ト茸の図渡す。松岡文橋来。龍村平蔵、江中無牛来。小林源太郎氏来。中央美術協会下山某、来月中旬展観の件にて来り、箱書の蓋預る。高嶋屋美術部使来る。栖鳳紙二枚渡す。珍らしく、井上徳三郎来。

廿日 快晴

江中氏来。龍村氏の帯地展覧会の件。午後より先生と帝展行き、夜八時頃帰宅。〔○〕高嶋屋美術部使、二尺巾双幅、高士観瀑渡す。

廿一日 雨

夜、東京会田中より電話。大石静雄来。箱書預る。午後、碗屋の会へ御出掛け。雨のためとて半日にて終ふ。廿二日 夜、十一時帰宅。

廿二日 土曜日

長岡井口庄蔵氏より鮭かす漬着。午後、東京行き伊予紋<sup>〔料亭〕</sup>の由。上田恒治、箱書二来る。武山との合作蓬萊。渋谷の杉浦某、黄初平（席画）箱書二持参、預る。大塚源太郎来。鑑定。風竹と小品。奥様昨日頃より□□□□のため寒むけなす由にて、一日中御寝み、夕刻大胡医師に診察を乞ふ。□□□□のためなれば心配なしと云はる。先生帰宅、一時半人力車にて御帰り。紙入紛失なせし由。

廿三日 晴

高嶋屋氏より良寛の本着。井口庄蔵様、鮭、礼状出す。岐阜県武儀郡吉田村西町、林代蔵より毛皮、箱書の幅着。川口誠三郎より樽柿着。福岡市天神町小横丁、深江千代壽、洪沢さんへ行つて居る寿老（尺八）の偽筆を箱書に送つて来る。此れは観山会に描きしもの、箱書料が拾円入つてゐる。

廿四日 雨

松田の使来。紫紅筆「山雨」箱書預る。一日晴れると、少なくとも三日は雨の多八月なり。黒須廣吉氏来。〔○〕東京会田中良三来。尺八「竹林高士」渡す。安川喜一郎来。目出度かけにと、一千元出して無理に置いて行く。再三断るもとう／＼置いて行く。安川より電話にて、大彦の羽子板があった由、通知して呉れる。京都野口様奥様より小包来る。

廿五日 曇天

安川の使、羽子板持参。井上の親父「来」渡金盛物台（徳川初期のものらしい）持参。これと以前持参せし巻絵の筥にて尺五一枚を御願ひしたいとの手紙。百五十円の由。断り返却なす。原田金蔵使来、催促。廿五日の約束の由。京橋区木挽町四ノ二 井上質店 松田の使来。紫紅筆山村の箱書渡す。亦、養由ノ図預る（紫紅筆）林代蔵、深江千代壽の書、箱書、書留にて出す。明治大学生、若松正一と云ふ者来り、大学昇格の基金のため絵を寄附しろと云ふ。中川忠順氏来。田町の渡辺様、

下の下村の祝に来る。太田鐵次郎様来。  
発信、松岡文橋、林代蔵。

廿六日 概 晴

〔○〕島田友春氏来。尺八□渡す（漁船あり虹を見る）。もと美術院の看板等を書きしと云ふ関野とか云ふ男、東洋美術研究会幹事などと云ふ名刺を持った某と同伴にて来る。高橋徳三氏来。鼓の胴を置いて行く。石川安助より電報にて催足。市内尾上町高橋三郎、紫紅筆（席画）五條の弁慶図、箱書に持参。

廿七日 快晴

東京の水木伸一と云ふ者、崑山筆「竹と郡雀」鑑定に持参。偽筆。静岡の山梨氏より蜜柑箱入二個、箱書幅、一個着。

静岡県庵原郡江尻町 山梨謙蔵。

竹田露村来（本美日本画出身ノ由）。〔○〕石川安助、尺八、一枚渡す（問答）。

大塚源太郎来。尺五、墨画、風竹、鑑定に持参。先頃預りし風竹と同一のものなり。箱書と云ひ、絵と云ひ、よくも似せたり。今日持参いたせしものは、正銘真筆。以前のは、四度来り二度真筆と返答せし程、巧妙に出来たるものなり。長谷の一休の（半切、大塚が青森佐々木氏に土産にせしもの）箱□枚持参。これは二枚箱書せし故、一枚は受戻して貰ふ。

廿八日 金曜日 曇天

大先生の法事の為め、一同東京へ行く。留守中、琅玕洞主人、安川大成堂来りし由。出品の観音像着。画室へ安置する。黒須氏来訪。来月四日、観山会

の人々来浜。三溪園へ来るとのこと。〔○〕尺八、虹（山麓に虹あり傘さし走る人二三人）黒須氏へ渡す。これは先頃観山会を京都に開きし際、松茸狩の礼の由。赤尾藤吉郎（返信書留）大宮川大寿、青森県山崎清三郎より鑑定の幅着。偽筆（海辺の図）。

卅日 雨 日曜日

神戸中西嘉助来。矢部岩蔵、山崎清三郎、返信出ス。郡山川口誠之助来。画帖尺五、六枚の催足。

〔欄外〕  
十二月

十二月一日 晴

原田金蔵代人来。宮川大寿来。齋藤隆三氏来。信州片倉代人来。齋藤隆三氏へ光起、化狐、御貸しす。

二日 晴

島田友春、川嶋鉄之助、大塚源太郎来。異画会出品画の老子（木炭にて線描させしもの）と夏の富士と題せし幅持参。児玉氏来。午後三時、諸井様へ御出掛け。午後十二時、帰宅。

三日 曇天

東京会田中来り石原氏「文珍」<sup>〔殊カ〕</sup>の手付として、金一百円置く。赤羽氏を介し□□の三幅対と尺八とを交換せし本人（信州の人）来。片山久、下山吉田儀作氏の件にて来る。赤尾藤吉郎より、一口尺八一枚にてよしとの返あ



り。夜、石原氏へ一百円届く。山梨県謙蔵氏箱書鉄便(鉄便)にて出す。

四日 曇天

来客の準備。高嶋屋店員、秋の会、二尺巾双幅の代、二仟五百円持参。片山  
久来。午後二時、高田様令夫人等、御六人來。夜、自分は夜行にて出発。

五日、六日、七日、留守。

原田金蔵、尺八、〔○〕「夕月」漁夫、停船、児童垂足。

八日 晴

午後四時帰宅。〔○〕安川大成堂へ尺四巾、高士渡せし由。

九日 晴

井上徳三、琅玕洞主人、渡辺実来。

十〔○〕二尺巾、竹林弹琴(倉林氏)の分。先生自身、石原氏宅へ持参。尺  
八の双幅をこれにてすませたしとの事。山崎清三郎、小包にて出す。

十日 晴 霜を見る

林の奥様東京行き。障子張り。春草未亡人、令息来。大阪三越より箱書の蓋着。

昨日、府中の浅野と云ふ人から、府中味噌が一樽来てゐる。今日は国府津の  
高田令夫人より蜜柑が来る。〔○〕渡辺実、尺八、蓬菜渡す。

十一日 快晴

障子張る。箱根小涌谷温泉の榎本恭三、菓子折、尺八絵絹持参。先年、先生

当地へ参られし節の御約束故、何分御願ひいたし度いと云ふ。先生は知らな  
いと云ふ。菓子折と絵絹預る。松岡文橋来。ギヤマンの瓶、三個持参。大院

君の持ちしもの、由。これと二拾円を包んで来て、色紙二枚を描いて呉れと  
云ふ。昨日、渡辺実氏に渡した蓬菜は高嶋屋で焼かれた春草、大観双幅の代

りに持主へ出すのだそうだ。神田一つ橋俳画堂より箱書に來た張果老は、佐  
藤日天と云ふ新聞記者にやった画帖を表装したものである。

音(菊)きくから鮭着。根岸鉄太郎来。手紙等を整理すると十一月二十八日附の手紙  
と云ふ者から銀行小切手で二百円封入して、明治四十二年六月中「河渡りノ

虎ノ図」を依頼してある。子孫に伝ふるものであるから、雀一羽でもよいか  
ら描いて貰ひ度いとある。寸法は別に記してない。

十二月四日附手紙

高崎市本町 櫻井忠三郎

塩川兵弥より周旋されて求めし屏風、豊公三百年祭の桐の花の図は真偽(真)かた  
しかめたいと云つて来る。

十二日 概(マ)ね晴

乾南陽氏来。佐藤一齋の書持参。百三十拾円、現金にて支払ふ。関谷弥兵衛、

鶴殿長康来。浜町中島元芳箱書来。扇面、二、白藤、石草(石)、春草色紙直し「月

夜」。野毛倉林氏より電話にて絵を受け取りし旨申す。

十三日 土曜日 曇後雨

朝より曇り、午後に至りて雪さへ降る。甚だ寒むし。雪は雨となる。瀬能正太来。裏粕（粕）「日出」の催足（足）、原田金蔵、礼に来る。山の下、春木とか云ふ家で電灯の線を設くのに、樹の枝が邪魔になるから、切らして貰ひ度いと電話にて申し来る。埼玉原草加町大川十三代、引舟図、鑑定に来る。偽筆。井口庄蔵氏より、荷着。

十四日 晴

東京□特殊小学校より寄附画の催足（足）に来る。画帖預る。横浜商工課長の吉田と云ふ人、展覧会の件にて来る。京都終より魚着。大阪三越箱書出す。サムライ商会野村氏宅へ尺八「○」「雲来」持参。表装にまわして貰ひ度との事故、預り帰る。

十五日 曇後雨

寺内新太郎氏来。中根、平塚へ五百円支払ふ。残金二六円余。二三日前に来りし鯛は、舞鶴にて一万五千からとれしものと云ふ。長谷栄吉使来。小屏風預る。

発信、井口庄蔵、松岡文橋。

十六日 晴

田口巳之吉、柴田克己氏の使にて来り、大観氏の小品、竹、持参、預る。午後二時八（料亭）膳に高峰博士に会すべく、出掛けらる。「○」松岡文橋氏来。尺五「雲来」一枚渡す。先日の色紙は二枚にて、小切は取消す事、色紙二枚と

念を押す。斎藤元四郎来。井上徳三来。灯一個預る。夜に入つて平林大虚氏来訪。画会をするから先生に御承諾を得度しと云ふ。画会も月並の画会のようにものでなく、自分の研究本位の後□会（後）だとの事。清方や高田早苗氏等が賛助員を承諾したと云ふ。小柳町大久保の伝次君、夜に来。先頃まで、北海道へ旅行して居たと云ふ。探幽の三幅対だと云ふのを鑑定に持参。其時の話。卅貫になる熊が一匹中野にあるから、それを殺すとき美術家の天狗達をして、何処か山へつれて行つて銃殺させ度いと云つて居る。

十七日 晴

箱根小涌谷、榎本恭三と云ふ人、先頃、尺八の絵絹を置いて帰つて、今日出なほして来る。謝礼は出来の上に頂戴すると云つて、揮毫を引受け（引）しまふ。此の牛込の青木と云ふ人の家内が、箱書を二ヶ持つて来る。紙本の半切、竹に（風吹）ババ鳥の図は、二枚にはがしたものである。一寸銃筆版の様に見える。印だけは写らないとみえて、印の処は切抜いて後から入れたものだ。今一つの色紙の直しは、安田鞆彦の畑のものに観山と印を押したもの。島田友春、琅玕洞主人来。桐のクリ盆渡す。大久保の伝次君来。昨晚の探幽返す。黒須氏来。石川丹麗女史来。画帖二預る。年内の由。謝礼として、伍拾円持参。遠山氏の尺五もと云ふ。三越清水氏来。静清の箱書に来る。揮毫料、二尺巾双幅にて、千七百円也。夜、尺五「○」「清水観音」を石原様宅へ届ける。鈴木良治氏の分、屏風を手伝つて貰ふべく出掛けたのだから、静岡へ行つて不在。

十八日 晴

朝、電話にて、横山様へ今日の忘年会断る。野毛倉橋氏より二斗入酒樽（載）載く。

国華社蔭山氏来。寸法何にてもよし。本郷高谷氏代人、安田市太郎来。井上徳三来。此間の灯明台、八拾五円だとの話。

十九日 晴

朝日新聞の横尾と云ふ男、しきりに面会を求む。「丹青」の主人が、本月か来月中に面会したいからと云ふ。木村久雄より荷着。豊崎俊文より蜜柑一箱着。本郷高谷氏より林檎着。堀口氏へ歳暮に行く。夜、高谷氏の礼状かく。

廿日 慨晴

発信(編外) 五藤竹重郎、坂奇坦(朝日新聞)、高谷豊之助、木村久雄、豊嶋俊文。堀口氏来。倉橋の件、柵屋西村善三郎氏、櫻井定二郎来。中央美術協会(下山儀三郎)より歳暮品着。高築誠之助来。

廿一日 日曜日 曇り

福沢市太郎来。追加金一千円を出し以前の百五拾円にて、色紙か何か小品二つほしいと云ふ。奥様が受取出す。先方では、最初、色紙二枚、短冊三枚(絹無地)、尺五双幅、尺八、一枚と云ふ申込なりし由。倉林氏来。宮内省本金庫へ受取出す。書留にて、鶴殿長康 □ □ □ 濟寺の水指様のもの持参。湯本福住橋畔、背妹尾春太郎より塩から着。

廿二日 快晴

大野様、葉礼払ふ。第三期所得税、戦時利得税支払ふ。越野様(琴)へ行く。宮内省よりの手当、三井銀行にて手続き済み。林奥様来。

肥前大村町 高比良雄之充

より蜜柑一箱着。青森宮越正治氏より鯉節(白木屋使持参)来。

廿三日 晴 冬至 ゆづ湯。

朝日新聞の横尾来。明治神宮御屏風の □ □ □ 図の腹案と、申年に感して何か伺ひ度いと云ふ。サムライ商会野村氏より電話にて、先日、御覧に入れたペルシャの瓶や壺の中、御気に召したのを差上度いと云ふ。【○】老松に寄生木、六曲一双仕上る。原様の使に渡す。

東京府南千住町百拾六番地、池田屋

電話下谷三三三二、乙部喜兵衛

例年の如く、漬菜一樽の送状来。夜、太田吉松より電話。

廿四日 曇天

太田吉松来。年内、半切二枚送る旨約す。鴨一羽持参。青木の家内、雅邦先生幅鑑定に持参。豊公祭の屏風半双、極めを得度き由。三溪園河田氏、光琳筆、虎、御貸す。松岡文橋氏来。箱書(尺五 雲来)渡す。徳川家にて女中の用ひし羽子板、歳暮として鬘斗を付けて持参。大村マス来。佐藤益之氏の依頼にて、尺八に寒山拾得を願ひ度いとて、金五百円包を置く。根岸鉄太郎代人、二人にて箱書持参。三幅対「三上戸」、大正八年試作展出品画、井上の桃山屏風と交換せし二五巾、隠士(竹林遣遥)、石川安助使鑑定。高崑屋、双幅、会へ出品せし「三平石葦」。大塚源太郎来。大石静雄氏、箱書渡す。

廿五日

青木堅太郎使、屏風渡す。興業銀行の利子、一、二六〇円、三井銀行へ持参。紀州の橋本と云新聞記者来。高田様より小荷物着。酒樽、四斗入着。差出人は向井としてある。大阪、日本美術株式会社より小包にて、拾円債権三枚来る。土浦板野氏よりワカサギ着。本所東之町安藤徳三郎より、御歳暮として菓子来。これにて三度目、一向に思ひ出せない。精華社より本着。高嶋屋□殿塚来。箱書「○」「高士観瀑」渡す。「オモダカ」箱書預る。

廿六日 晴

目黒十郎氏より梨着。長井利右衛門より茶来る。例年の如きもの。赤尾藤吉郎来。(午後) 尺八二枚と話さまる。一枚は年内にて、後一枚は来年追加金を持参して頂戴すると云ふ。

廿七日 晴

大阪市北区堂島浜通一丁目、大日本美術株式会社

拾円債権三枚、書留便にて出す。神戸市野島呉服店、袋布(布袋)(半切、村松雨石氏へ渡せし函) 箱書出来したれば、書留(四四九「号」)にて出す。観山会にて、午後三時頃御出掛けにならる。八百善(軒)の由「○」木村博士の処と承る。絵は尺八双幅、右に悪鬼の腕を抗して立ち□□□の調べを聞く。左、官女風の美夫人□□□を弾ず。近來の傑作の様、拝見す。増田義一氏の分。帰宅十二時過ぎ。夜、暮の市へ□□□を買ひに行く。甚だ寒し。チラ／＼落ちるものさへあり。廿「夜」、竹田文吉氏より四斗入酒樽着。肥前の高比良氏よりカラスミ届く。

廿八日 雨 甚だ寒し

山田様より御歳暮として、画室用電球三個贈らる。日本橋「○」音菊の画帖、川口誠三郎の画帖、紀州新聞の橋本某の画帖出来。東京府荏原郡大井町倉田三四〇五、特殊小学校後援会、小原梅太郎英時様歳暮に行かる。東京の親戚方々ならん。京橋の高島屋付近の洋服屋来。箱書蓋「オモダカ」二五巾横物、依頼する。

石川県能美郡板津村字高臺、高林澄月

昨夕、「このわた」青竹に入れるもの二本着。中央美術協会下山儀三郎の尺八揮毫料、一千円の預り云々の件にて、不明になってゐたが、はからずも一千円の包紙が出て来て、預つたと云ふ事がわかつた。中央美術協会としてあつた。彼の男が先頃来ての話。七月頃に御預けしたと云つてゐた。先生の帖にも記入してないし、自分もうろんになって居た次第である。市内、大橋とか高橋とか云ふ書画屋が、春草の小品、柳に鶯と燕、双幅、箱書に来る。真筆。先頃、根岸の使で箱書に来た(二五巾、隠士、井上の屏風と交換せし)斎藤嘉助と一緒にだつた男が夕方来て、原田金蔵の尺八に就いて、話しをしてゐた。これも其の男の話。三越「静清」、時価五千円位との事。千七百円が五千円になつてゐる。「○」長谷に渡す翁……菊に水やる……尺八は、ほ……出来上つてゐる。新紀州新聞社、橋本義雄へ画帖出す。「○」川口誠三郎画帖発送。

廿九日 晴 風あり

渡辺実氏、来訪。

斎藤隆三 浮世絵 一冊。

矢口政三郎 わかさぎ

茨城県新治郡田余村高崎

佐々政徳 のしいか

東京京橋区新柴町三丁目四番地

文部省、帝展画集 二冊

上野精養軒 ビール 切手

松山の瀬川喜七、五百円の小切手を書留でよこして、尺八を描いて呉れと云ふ。何処までもづう／＼しい男だ。書留が届いたかと電報が来る。五藤竹重郎より返電付来る。来春まで待つて貰ふ様返電す。北海道太田様から、鮭が二本着。や山本とか云御弟子来。竹内常吉来。紙本の小品一枚と金地扇面一枚、七拾円の包預る。宮本、紙の尺五、四枚が尺八、二枚になり、亦一枚になる。図は何んでもよし。瀬川喜七、書留にて五百円小切手返送。夜八時過、東京会田中良助来。

卅日 曇り

大谷喜嘉平、日渡様。午後〔〇〕赤尾藤吉郎、尺八、観音持参。天王寺、〔〇〕三原屋、尺八横切〔三保〕持参。長井家、寺内、安立寺、歳暮に立寄る。長谷栄吉、尺八〔〇〕「白菊翁」渡す。川嶋鉄之助来。南米岳息、箱書に來。「孤月筆」〔不〕書ず。児玉天来氏来。関本為吉氏より蜜柑一箱着。前田兼実氏より鮎のかす漬着。中嶋某来甘栗  
東京日本橋区浜町二ノ一三、中嶋元芳  
より甘栗着。千登世の扇面を世話した男、飾屋の由。中村岳陵来。

卅一日 晴

画室の西の開き、掃除す。尾張一の宮、中央美術倶楽部の封書（書留）を茶の間で拝見発見。一百円の小切手在中にて、来春二月初旬の展観に入用なれば、一月中に御揮毫願ひ度いと云ふ。文面、早速に書留配達証明にて返送す。瀬川喜七より電あり。御諾否を返乞ふと云ふ。中根、平塚の分、四百〇五拾八錢支払ふ。野毛倉橋氏、竹林弹琴、野村サムラヒ商会「雲来」表装出来、寺内より届く。早速野村商会へ持参（表装代四拾一元）。倉林氏宅へ持参、五拾五円、表装代預る。乙部喜兵衛氏より菜漬樽着。下山儀三郎来。

九年一月

九年一月

一日 晴

七八軒廻礼。山本氏（児玉氏招介の）年始に來。

二日 晴

深川鈴木某、鑑定に來。尺八席画らしき墨画の竹、宜しければ表装をなほし、改めて箱書に來る由。島田悦山来。

東京四谷須賀町廿六桂方 飯寫南風

大正五年二月十六日、横浜に來り先生に面会なし、尺八絹本一葉三月末までの約束にて依頼し、其後何等の返事なし。來る二月末迄に、半切一枚、五拾円にて揮毫して貰いたいと書いてある。新聞記者に対する好意上、描いてよからうと云ふ乱棒（暴言）な言ひ草である。

三日 概ね晴

東京の松田、島田友春、年始に来る。島田氏、藤原為恭だかの下図を持参。

四日 晴

瀬川喜七より鯛塩漬来。夜十時過ぎ、下の下村の近所に火事あり。一〇軒にてすむ。あき家なり。甚だ寒むし。一同にて、此度の庭に出てカメラの前に立つ。琅玕洞主人年始に来る。

五日 晴

客来ほとんどなし。

六日 曇天

五藤竹重郎より来信。十一日すでに入用の由。寒むき日なり。

七日 曇り

昨日から寒の入りの為めか寒し。天王寺三原屋より礼に来る。関谷弥兵衛、中村岳陵、飯下山儀三郎、年始に来。中央美術協会、此の十五日頃までに入用の由。元美術学校卒業生にて白濱とか云ふ人、乾南陽氏と同期ならん。華山の描いた三組入を持参。先生、先頃中より、しきりにほしがりし品故、早速、現金五百円を渡し、後は何にか一寸したものを描く約束にて引取る。この□□は、此の人の祖父に当る人が金座に居た時、華山に描したのでさうだ。それを三代目の此の男が生活に困って手放すのである。千円位、ほしそうな口ぶりであったとか。野村サムライ商会より、先頃立て換へし表装代、

金四拾一円持参。

八日

羽後酒田港中ノ口町、高山長之助と云ふ未知の人から書留で封書が来た。開いて見ると文面に

申込書

一金 五拾円也 紙本半切

右之通り、御送金申候也

拝呈、誠にお手数恐入り候。厚く御礼申上候。さて画題は先生の御得意作をたつた御一筆書きに宜しき候。此儀、特に御願ひ申候也。

菊地契月先生様（元文のま、）

とある。そして、両羽銀行の小切手で五拾円入れてある。随分□□たものだ。早速書留で返してやる。

九日 晴

荒井寛方氏来。和歌山橋本義雄氏より蜜柑二箱着。平家納経着。大和絵同好会、七月より十二月までの分、金二拾四円、振替にて出す。昨年の暮、差出人の不明だった酒樽は、肥前の高比良氏と判明した。

大阪市築港八幡屋町一七番地、高比良雄之充

山梨県南都留郡勝山村、大石静雄

より小包にて雪（清原路哲）の雫来る。

十日 快晴



市川の田中喜兵衛氏より醤油一樽着。谷上隆介氏来。大観、洛中洛外雨十題カタログ持参。高比良氏へ酒の礼状。二葉会、五藤竹重郎、田中喜兵衛、三越、発信。

市内北方、羽生龍太郎と云ふ男の父が、華山の絵を持って居るから、若し御望みなら御目に掛け度いと手紙で云つて来る。奥さんの御話によると、昨日、石原さんが来て、正金二百円の包みを出して、村松雨石が半切二枚御願ひしたいから御預り置き下さい云つて、二百円置いて行つた様だ。

村田直吉、

大野禎一、

々 徳治、

大胡喜作、

三田四郎

堀口 哲、

伊藤脩徳、

田代戸太郎

亀田行蔵、

高橋保之、

西郷健雄

吉田栄治、

岡野哲兼

津田蒔太郎（移転）

以上は、回礼書いたり、先方から来たりした分。此の土地で、毎年十四五軒、歩けばすむ。金閣寺より小さな箱入りの納豆が来た。年賀状をすっかり忘れて居た。

新潟市上大川前通十一、小川巳三郎

より箱書の小包着。山形巳兵次郎氏来。

十一日 晴 日曜日

特殊小学校、梅原氏来。島田友春来。村松雨石氏親子来。下村平之進夫人来。小港、市川の老婆来。下の井上とか云ふ人が、青木堅太郎の代理に来て、先

頃の席絵の廣業と双幅の [ ] の図の箱書をして貰いたいと云つて、置いて行く。高屋肖哲氏来。

府下千住町四ノ六五、高屋肖哲

静岡市外川辺 村松雨石

十二日 曇天

酒田、高山長之助、書留にて五拾円小切手を送つて来。先日の [ ] が間違したと云つて改めて依頼して来る。早速返送する。

受信、片山久、福沢市太郎、いづれも催足。

十二日 曇後雨

北方、羽生龍太郎、華山筆だと云ふ虎持参。江川太郎左衛門 [ ] 筆をして居た人、一万円位でなければ売らぬと云ふ。めつたな人には見せないで置くと云ふ。気毒なものだ。水戸渡辺実氏、外二名来。小座敷の病間へ通つて新しい依頼画をして居た。夜、吹き降り。

十三日 晴なれど風強し

朝、電話にて洋傘を深川の玉泉院まで届ける様、寺内へ話す。午前八時、雅邦先生の墓参に御出掛けになる。「正午」十二時、帰宅。風強、南の雨戸閉める。京橋材木町伊藤洋服店よりマント（千代子の君の）、書留にて来る。八時少し過ぎ、二つ半鐘なる。谷中の寺内へ電話にて荷車を頼む。十五日、小屏風（諸井様の分も）を乗せて引き出す由。風なか／＼に止まず。

十四日 晴 風あり

昨夜の火事は八戸坂とかで、十五戸焼けた由。章君、東京林家から通学すべく行く。溝口禎次郎氏来。

十五日 晴

絹十五六枚張る。高築誠之助来。夜十時過ぎまで、画室に話しこむ。下山儀三郎来。水戸の渡辺氏も高築氏も福岡で展覧をする由。

十六日 晴

華山の盃の台へ松をかゝる。不相変の風□□人夫二人付。四時頃、寺内より荷車着。諸井様の六曲、黒須様の二曲、東坡先生屏風なり。南條氏の六曲、鉄道にて着。

十七日 晴

早朝、荷車出る。風呂桶、屋具、本箱、机、行李等載せる。京都十合呉服店の美術部の人だと云ふ二人連来り、三月の展覧に尺八か二尺巾を一枚、御願ひいたしたいと云ふ。千五百円預る。釋義堂氏来。三重県の何山某、三銭切手百枚封入、それで絵かほしいと云ふ。そのま、配達証明にて返送す。小川巳三郎、新井徳次郎、箱書發送。元園町一ノ一三、下山儀三郎へ電報うち、絵の出来た通知。

十八日分(欄外)

野毛、倉林氏、夜九時頃来訪。画室にて十一時近くまで話し込む。

十八日 晴

好天気なれば客来多からんと思ひしに、ほとんど無し。

十九日

根岸鉄太郎へ電話を通ず。下山儀三郎より電話にて画題を聞合す。目録にするための由。明日とりに来る由。昨夕うった電報が、未だ届かぬ由。

廿日(欄外)

麹町区元園町一ノ一九

電話 九段 八四一番 下山啓二郎来。尺八「○」「哲祖」渡す。

廿日 晴

竹内常吉氏来。川口誠三郎より何豆とか云ふ菓子着。根岸鉄太郎使に尺八「○」「春」||高士あり背に桜らしきもの描く、春と題す、を渡す。

廿一日 曇天

乾南陽外某一名同伴にて来訪。「栄之」の幅持参。市岡傳太郎来。昨十二月下旬、鶴殿氏、箱入朝鮮湯瓶箱を持参せし時、横物で□眠「トウミン」筆、盤□(盤)「バンケイ」(盤)禅師||猪の首を盆に乗せ前に置く。それから□□「タツツナ」筆、(盤)手観音図、尺五位の中の二幅を持参しはせぬやと云ふ。鶴殿、目下行衛不明で□□中だと云ふ。瓶は一時預り置き下さいと云ふ。今泉雄作氏の照招介(マ)の名刺を持参して、赤穂義士の図を描いて貰ひ度いと、物づきな人が来る旨□□書を見ると、堀部安兵衛、高田馬場仇討たの、大石良雄妻

子の決別の図だのと書いてある。

廿二日 曇天

京都滞在中の田中良助氏より千枚漬一樽着。郡山川口誠三郎来。〔○〕尺五、  
叭々鳥、山水（支那）、哲祖の三枚渡す。澤達三郎使来。画帖、鑑定（馬ノ図）、  
孤月筆、山水。箱書を謝断絶す。代りにレターペーパーに、本日御持参の孤  
月筆、山水は真筆と拝見仕り候と書いて渡す。小玉天来氏来。

廿三日 晴

竹内常吉来。福澤氏〔○〕尺八、幽<sup>か</sup>□□□□渡す。大阪、吉村元次郎、鑑  
定に来る。横物、田舎の村ばれ、栖鳳の畑、出<sup>す</sup>□□出鱈目の印あり。

廿四日 土曜日 晴後雨

来客なし。

廿五日 晴

特殊小学校、小原氏来。〔○〕尺五、三保、一枚渡す。画帖は預り置く。小川  
巳三郎より無礼なる手紙来る。「箱書の蓋を預けてあるが、若し見当らぬ時  
は小品物一枚揮毫せよ」と云ふ。乱棒<sup>棒</sup>な奴だ。

廿六日 晴

関谷弥兵衛来り、来月の五日の婚礼までに二曲一双を間に合せて載<sup>載</sup>きたいと  
云ふ。試作展〔○〕出品画、寺内宛送る。二五巾□□。林の幸蔵様来。

廿七日 未晴

塩川表具屋より雪竹に小鳥の幅、鑑定に持参。安川大成堂に十幾枚描きし一  
枚と云ふ。五浦へ入る前年の由。巢鴨太田様来。島田友春氏、溝口氏の光起、  
幅持参。川口誠三郎より千柿一箱着。

廿八日 晴

夜になって高築来。画室へ通る。澤達の使、先日の画帖へ落款を貰ひに来る。  
今一つの箱書は老子。たしか高橋幾造へ描いたもの。黒須様来。

廿九日 雨 甚だ寒し

柿沼、越條等、三人来。吹き降り。東京は雪の由。林代蔵より小鳥着。今日、  
試作展覧会の鑑別の当日で、午前十時までに美術院へ出掛なければならぬ  
のだが、御やめになった。前田侯爵の例の絵巻第□を先頃から初められて居  
るが、健<sup>マ</sup>築が面□倒<sup>倒</sup>なので、なかなかはかどらぬ様子。階段には、平<sup>マ</sup>困だと云っ  
ておられる。

卅日 晴

銀行にて二百円小切手を作り、五百円、本所の銀行の小切手と合せ、七百円、  
書留にて溝口禎次郎氏宛出す。先日、島田友春氏が持参せし光起の幅の代な  
らん。五藤竹重郎より電報あり。返信付き。飯塚某、荒井寛方氏の招<sup>マ</sup>介にて  
来り、尺八、一枚依頼なし、千五百円置いて行く。長谷栄吉、大塚源太郎来。

卅一日 晴

梶本八重二氏、画帖、柿図渡す。美術院より画題の事にて電話あり。寺内へ電話をかく。太田吉松、来月五六日頃、来る由。五藤竹重郎、二三日中には送ると返電す。

(番外)  
二月

二月一日 曇後雨

平塚、中根へ二百円近く支払ふ。但し、五十九円の砂利代と工々手間、三十四円、合計九十三円、平塚分、先月十八日以後は支払はず。八十一円四十銭は、中根へ支払ひし分。柿沼氏と同伴せし坪井氏一人にて来訪。三月  
□□ 節句の幅をとて、百円にて半切、尺八等、三枚置いて帰りし由。松山、清水より電報にて箱書送れと「申し」来る。午後、まったく曇り五時頃より雨降り出す。

二日 雨

井上徳三来。尺八「を」一枚依頼して行く。

三日 曇天

有朋堂書店へ一日三拾一円二拾銭、振替にて支払ふ。但し、有朋堂文庫代。中川忠順氏宛「○」絵巻一部分送る。大村有慶発送の出雲大社の御守、並びに大黒天返送。名古屋朝日新聞社美術部へ書附返送。

四日 晴

太田吉松、半切「○」三枚渡す。ボケ、錦木、布袋、四枚のところ、此の三

枚にてすます。

山形県酒田上中町二番地、中村太助

小包にて、水飴、箱（但し依頼の幅、出来の上、箱書なし送るべき）着。銀座東京美術館より、尺八、南泉斬猫、鑑定に来る。鈴木直三郎、半切、山水（観山会の記念分配分）を持参。鑑定。岐阜五藤竹重郎「○」尺五、「引舟に虹の図」発送。

五日 雨

石川鶴治氏、画帖二、谷中寺内へ持参。京都柘屋より干魚着。

六日 曇天

小川町加藤某（長岡の井口氏を知つてゐる人）、布袋之図、鑑定に持参。偽筆。桐生塚本武一郎来。成田山の御札、例年の如く持参。飯寫勝太郎南風来。関谷へ電話にて二枚曲、出来の由旨通す。

神田 六百八十番 関谷弥兵衛

七日 曇天 甚だ寒し

関谷弥兵衛来。「○」二曲松竹梅渡す。自動車にて持ち帰る。奈良美術院より春日燈籠、二個着。永山近影氏、前田利為侯代理に絵巻の挨拶に来る。飯嶋南風来。半切、「○」維摩、一枚渡す。

八日 曇り後雪

正午近くより雪降る。午後、長野草風氏来。

九日 雪晴れ

坂間順之助来（色紙二枚の件）。八王子より山吹植来る。濱中氏来。

十日 晴

中西嘉助氏、尺八「〇」、清涼渡す「側面の高士、竹林」。八王子佐藤兌氏よりツ、子植八個来。大久保、次男君来。琅玕洞、林氏来。何にか依頼す。

伊豆伊東町玖須美竹町、大久保利喜

十一日 晴 風あり

八王子市佐藤兌氏他一人同伴来。但、例のおいそ君の案内。乾南陽氏来。応挙、狗「ケン」、持参。三百五十円にて買ひ取る。尺八双幅、嵯峨野（定家）渡す。

岡野哲策氏、石原氏と来。有朋堂文庫、本箱着。硝子戸一枚破損す。高寫屋の高橋初郎氏来。小品画の催足。大阪の朝鮮鉾産株式会社内、無声会より書留の封書にて、為替券三拾円来り、杉本丘花と云ふ青年画家が前途の望みを囁され、管ら画の研究に没頭したいから、画を一枚寄贈して呉れと云ふ由。丘花後援画会趣旨と印刷物が入ってゐる。そして、景品画御寄贈諸大家先生（イロハ順）として、ずらつと例挙してある。今一つ、愛知県西尾外町、三浦香峰と云ふ男、広告を裏返した手製の封筒にて、一円五十銭の為替と、三十に四六寸位の小さな画□紙を一枚入れて、これに描いて呉れる様にとある。松山市湊町四丁目、清水義影よりの返事。竹林高士之図、画帖小裂（横九寸、縦八寸）。

十二日 晴

無声会、三浦香峰、書留にて返送。横須賀山王五〇原巖氏より鴛鴦（香い）つかひ来る。

十三日 晴れたれと風あり、さむし

京都西村庄助なる者より漬物着。夜、高築来。試作展出品画、売買の件にて来る由。

十四日 晴

齋藤隆三氏来。老子出関ノ大幅、外一幅御貸しする。沼田一雅氏より電話にて、明日、大阪工高の土肥助三郎氏同伴にて来訪の由。

十五日 雪

雪がみそれになり雨になり終日晴れず。谷上隆介氏来。川寫鉄之助、稲垣利恭来。三月下旬の展覧に、是非、尺八を二枚揮毫願ひ度い。先生も奥様も留守の様取計ふ。内金として、二千元並びに絵絹二枚（尺八）、先生、帰宅次第、返答によっては、或ひは、返却するかも知れず、た、仮受取のみ差上げて置く由事にて、二千元と絵絹預る。十八日の頃、御伺ひして、其の節、御返事を聞き度いと。日本美術主筆、石原翠葉、武山氏紹介状持参。千五百円にて、尺八一枚、色紙一枚の約束にて、銀行小切手、千五百円置と画帖（僕の画帖と書きしもの）を置く。廿一日頃来る由。沼田一雅氏、土井助三郎氏来。午後三時頃より十時過ぎまで、画室にて話し込む。

十六日 晴

京橋三八〇二番、帝国美術株式会社へ電話を通ず。昨日、川嶋氏より預りし

二千円返却の件にて。

十七日 晴

川口誠三郎より鴨一羽着。黒須様来。早稲田校友会依頼、寿星(二五巾)渡す。此の廿日の校友会に大隈侯に贈る由。

十八日 曇天

渡辺実氏来。明治神宮の件にて荻野伸三郎氏来。京都廣瀬氏、百円の受取出す。これは、昨日菓子盆(桐細工)と来たもの。

十七日分追補。

京都四条通富小路西、三崎清二郎代人来。自身は心臟病のため、自動車にて下に待ち合せ、代人を登す。武山氏の紹介状持参。依頼拒絶。

十九日 曇天

齋藤隆三氏、中村岳陵氏来訪。此間の幅返す。今日あたり、川寫鉄之助か稲垣か、何れか来るかと待つ。終日来らず。牛込鈴木直三郎、墨画、尺五、風竹(多分松岡文橋に描きしもの)鑑定に来る。ひどい偽物。大塚源太郎等、四度鑑定に持参して、一寸問題になりしものと同一の図。但し偽物にしても此か方拙劣なり。片倉の件にて、山口某の手紙持参。小林寿一の一件。

廿日 曇り

帝国美術株式会社、稲垣の私宅(柳町二番地(一))まで行って、此間預った

二千円を返し、受取をとって来る。諸井様、黒須様来訪。八時頃御帰り。今日、不在中、市岡傳太の使来。預品水さしを渡せし由。丹青の三部均来。

廿一日 曇

三部とか云ふ丹青の主幹、早朝来。三週年記念展観にて依頼なし来る。拒絶する。夜、先生と下の下村へ行く。小林源太郎氏之分と云ふ尺五双幅、出来る。

廿二日 日曜日

寺内新太郎氏、井上徳三氏来。京都廣瀬氏より和鏡拓本沢山来る。内務省井上清氏より先日御貸しせし洋傘返送し来る。早速、寺内へ返す。南米岳来。何にか依頼して帰る。

廿三日 曇り 雪模様

八王子在、久保田氏より山吹苗三ヶ着。

廿四日 曇り

小林源太郎、尺五双幅「鯉」送る。降雪四寸、終日太陽を見ず。

廿五日 晴

八王子佐藤氏よりツ、チ苗二十本着。西川大六使来。

廿六日 晴



江寫碗屋の会の絵、尺五「岩上観音」渡す。奈良美術院、春日燈籠代、八拾円、小切手を送る。大和絵同好会、第二期分会費、全部払込む。十合呉服店佐藤兌氏へ、はかき出す。

大阪南区日本橋筋一丁目交叉点角、奥田弥生氏より画帖着。高寫屋より小品画催足、来月初旬の由。

廿七日 曇り

先生、具合悪し。例の病、眠むられぬ由。内務省造営局より屏風下絵用紙着。十合美術部店員、尺八、維摩、一枚渡す。美術院より江原氏来り、尺八、絹本二枚入筒持参。四月初旬、同人展覧会の由。下の下村の材料費、金三拾円も預る。京都奥田弥生氏より漬物小樽着。大塚源太郎、小樽丹内重兵衛、同伴来訪。尺八、拾枚、一万五千元にて依頼す。内金として一万円持参。

廿八日 雪

来客なし。別に事故もなし。

廿九日 晴 日曜日

長谷の使、白菊図、箱書に持参。預る。高寫屋美術部宛、洋服立替金、百六十円四拾銭、小切にて送る。山浦□□と云ふ男、来りて曰く、昨年の十月に、先生に、尺二寸巾位の墨絵を（人物）を御願すべく、手紙で二百円、少ないけれども二枚の謝礼を差上げてあるが、あれは友人からは非なく依頼されての事であるから、御返事伺ひ度いと思つて上つたと。此の男の帰つた後、奥様に何ふと大変な違ひである。一百円で続絹一葉との事。彼

自身か、現金入りの手紙を先生に御目に掛けて戴き度いと置いて行つたま、の由。飯田町伊藤正之介より、春草筆「野ざらし」、鑑定に来る。偽筆なり。夜、高築誠之助来。京都速水御舟、富田溪仙へ紹介状（名刺）書く。春日燈籠の格子の硝子入れる。一枚、廿八錢也。

---

---

# Introducing Documents: *Yama no ue* (On a Hill), Studio Diary of SHIMOMURA Kanzan 【Summary】

KASHIWAGI Tomoh

The collection contains six volumes of a studio diary that convey the nature of Nihon-ga painter SHIMOMURA Kanzan's creative activities and daily life. The diaries were kept mainly by Kanzan's disciples, IRIE Tahei, NAKANIWA Jakumyo (Danka), YAGISHITA Zenzaburo (Seioku), and his sons, Hidetoki and others. The diaries recorded details of studio business, including the receipt and sending of letters, telephone calls, visitors, Kanzan's activities (working on paintings, going out), receipt and disbursement of money. The main function of the diaries seems to have been to remind the artist of the large number of painting commissions that arrived day after day, demands for paintings to be finished, letters to be answered, and requests for authentication (of old paintings and the work of Shunso, Shiko, Kogetsu, and Seiho). They were also useful in avoiding trouble related to accepting or rejecting commissions, autographs on boxes, and the receipt of money. They are valuable documents for understanding Kanzan's daily activities and creative work during his late years, but have not been reprinted.

The six volumes of diaries will be reprinted in order in this bulletin with the addition of bibliographical notes as a contribution to Kanzan studies. In *Yama no ue*, introduced in this edition of the bulletin, events in the studio from October 1, 1919 to June 30, 1920 are listed without a break. Of these volumes of *Yama no ue*, the entries from October 1, 1919 to February 29, 1920 are introduced here.